

Title	『女百人一首』の編者について
Sub Title	About the editor of "Onna hyakunin isschu"
Author	石田, 礼以菜(Ishida, Reina)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2024
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.127, (2024. 12) ,p.8 (223)- 27 (204)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01270001-0008

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『女百人一首』の編者について

石田 礼以菜

一、はじめに

『女百人一首』は、『百人一首』を模倣し、百人の女性歌人の和歌を一人一首ずつ選んでつくられた歌集で、江戸時代に多く刊行された^①、異種百人一首の一種である。

異種百人一首については、伊藤嘉夫氏の「異種百人一首の成立」『跡見学園国語科紀要』第十九号（跡見学園国語科研究会一九七二年三月）において、「百人一首というのは、百人の人の各一種づつを撰んで一組としたものをいう普通名詞であるけれど、単に百人一首というと、定家の撰といわれる小倉百人一首のことをさす。そこで、それ以外の百人一首は異種百人一首と呼ばれる。小倉に対する異種なのである。」と説明されている通りである。

『女百人一首』については、日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』第五卷（岩波書店一九八四年）の「百人一首」項（樋口芳麻呂氏解題）において、「『異種百人一首』（中略）『女房百人一首』（宮内庁書陵部蔵写本、安永九年（一七八〇）版本あり）は撰者未詳で、衣通姫以下の歌を収める。」と説明されているが、『女百人一首』の写本や版本は

その他にも複数存在する。しかし、『女百人一首』を中心に取上げた論考は少なく、現在まで本文系統の分類などが未整理で、それぞれの系統の成立年代や編者も不明である。なお、『女百人一首』についての先行研究は、四種類の「女百人一首」を翻刻して紹介した、伊藤嘉夫氏の「女百人一首」『跡見学園国語科紀要』第二十号（跡見学園国語科研究会一九七二年三月）や、『女房三十六人歌合』と『女百人一首』を比較し、それぞれの歌人の選び方について考察した、大伏春美氏の「女房三十六人歌合」と女百人一首」『語文』第一一九号（日本大学国文学会二〇〇四年六月）などである。そこで、本稿では、この『女百人一首』について、改めて詳しく検討してみたい。

二、『女百人一首』の伝本について

筆者の管見の限りにおいて、『女百人一首』^②は、おおよそ以下の通りに本文系統を分類することができる。^③

A系統（「山城賀茂みゆきせしかもの川波帰るさに立やよるとそ待あかしつる撰子内親皇」）→「陸奥塩竈浦いにしへのあまや煙となりぬらん人めもみえぬしほかまの浦 一条院皇后宮」

【写本】

・（江戸時代後期）写「諸国名所女百人一首」一巻一冊書写者不明（小泉吉永氏蔵）

【版本】

・寛永十九年（一六四二年）八月刊『諸国名所女百人一首』一巻一冊編者不明（刊記「寛永十九年壬午歲仲秋吉辰浪華書肆寺田与右衛門梓」^④）

・貞享三年（一六八六年）九月刊『名所和歌百人一首』一巻一冊編者・絵師不明（刊記「京蛸葉師通堺町平野屋瓦右衛門」^⑤）

・元禄六年（一六九三年）一月刊『諸国名所和歌女性百人一首』一巻一冊編者・絵師不明（刊記「永田調兵衛開板」^⑥）

B系統（「万葉集恋哥わかせこがくべき宵なりさ、がにのくものふるまひかねてしるしも衣通姫」）「古今集卷第一春哥待人もなきものゆへにうぐひすのなきつる花を折てげる哉染殿后」

【写本】

・貞享四年（一六八七年）十一月写「女百人一首」一卷一冊居初つな書（奥書「貞享四丁卯年中冬書之居初氏女都音」（宮内庁書陵部蔵）

・嘉永七年（一八五四年）写「女房百人一首」（数量和歌）所収」一卷一冊書写者不明（国立歴史民俗博物館蔵）

・嘉永七年（一八五四年）写「女百人一首」一卷一冊中村一由伎書（東京大学蔵）

・〔江戸時代前期〕写「女百人一首」（歌集）所収」一卷一冊（中山兼親）書（宮内庁書陵部蔵）^⑦

・〔江戸時代後期〕写「絵入女百人一首」一卷一冊書写者不明（二松学舎大学蔵）※貞享五年（一六八八年）刊『女百人一首』を模写したもの

・〔江戸時代〕写「女房百人一首」一卷一冊前中納言□光□書（宮内庁書陵部蔵）

・書写年不明「女百人一首」一卷一冊書写者不明（道明寺蔵）

・書写年不明「女百人一首草」一卷一冊書写者不明（道明寺蔵）

・書写年不明「女百人一首」一卷一冊書写者不明（北海学園大学蔵）

・書写年不明「女百人一首」一卷一冊書写者不明（三康図書館蔵）^⑧

【版本】

・貞享五年（一六八八年）三月刊『女百人一首』二卷二冊居初つな書・画（刊記「江戸西村半兵衛・京万屋庄兵衛」）^⑩

・安永九年（一七八〇年）一月刊『女房百人一首』一卷一冊編者不明（刊記「大坂彫刻川崎平六書林辻文助・定水善兵衛・高橋平助」）

C系統（「わかせこかくへき宵なりさゝかにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも衣通郎姫」）「つるにかゝるうきにもならは何かわかおもふこゝろのそこを知らせん徒一位教良女」

【写本】

・正徳三年（一七一三年）四月写「女百首和歌（「月花亭打聞」所収）」一卷一冊後陽成天皇編・平遠州牧写（国文学研究資料館蔵）

D系統（「ゆきのうちにはるはきにけりうくひすのこほれるなみたいまよとくらむ二条后」）「人わたすことたになきをなにしかもなからのはしと身のなりぬらん七条后」

【写本】

・〔江戸時代後期〕写「女百人一首」一卷一冊書写者不明（小泉吉永氏蔵）

【版本】

・嘉永四年（一八五一年）月刊『女百人一首』一卷一冊編者・絵師不明（刊記「嘉永四辛亥初春発兌彫工日本橋瀬戸物町飯田源三製冊発行芝神明前岡田屋嘉七・京橋五郎兵衛町仲屋徳兵衛」）⁽¹²⁾

E系統（「人にたに忍ふる中のあかつきをたかしらせてか鳥のなくらん安嘉門院四条」）「おもはしと心をもとくこゝろしもまとひまさりて恋しかるらむ賀茂のやすのりか女」

【写本】

・元禄三年（一六九〇年）写「女房恋百人一首」一卷一冊飛鳥井雅章写（久保田淳氏蔵）（奥書「此一冊者亡父一位大納言雅章卿真筆無疑者乎元禄三年初秋下旬左衛門督藤原雅豊」）⁽¹³⁾

不明

【写本】

・書写年不明「女百人一首」一卷一冊書写者不明（佐賀大学蔵）

・書写年不明「女房百人一首（和歌群玉抄）所収」十七卷十七冊書写者不明（陽明文庫蔵）

【版本】

・〔江戸時代〕刊『女百人一首』一卷一冊編者不明（刊記「仙台国分町十九軒伊勢屋半右衛門板」¹⁴）

それぞれの系統の本文の比較については、伊藤嘉夫氏が「女百人一首」『跡見学園国語科紀要』第二十号（跡見学園国語科研究会一九七二年三月）において、B系統とD系統の作品について、「内容は比較し難い」と述べているように、すぐには結論の出ない問題であり、後考を待ちたい。

しかし、この中でも、特に、貞享四年（一六八七年）写「女百人一首」（居初つな書）や、貞享五年（一六八八年）刊『女百人一首』（居初つな書）があることは、注目に値する。先行研究では指摘されていないが、今回、『女百人一首』の伝本を整理するにあたり、貞享五年刊本と内容が類似する、貞享四年写本が、宮内庁書陵部に所蔵されていることがわかったのである。

両書の書写をした居初つなという人物は、江戸時代前期の京都の女性書家・作家・絵師であり、居初つなは、当時としては珍しい女性作家であっただけでなく、自身の作品の挿絵を描く絵師でもあった。¹⁵ 貞享五年刊本にも、彼女が描いたと考えられる挿絵が載っている。居初つなは、主に女性用の往来物を著しており、居初つなについての主な先行研究は、居初つな作の往来物を紹介し、それぞれの概要を述べた、小泉吉永氏の「居初津奈の女用文章」『江戸期おんな考』第八号（桂文庫一九九七年九月）や、居初つな作の往来物について考察し、居初つなの経歴を明らかにした、石川透氏の「居初つなの往来物」『藝文研究』第九十五号（慶應義塾大学藝文学会二〇〇八年十二月）などがある。また、往来物作家である居初つな

が、多くの奈良絵本・絵巻を書写していたことが、同じく石川透氏の『奈良絵本・絵巻の展開』（三弥井書店二〇〇九年）で明らかにされている。つまり、居初つなは、日本初の女性絵本作家ともいえる人物なのである。先に挙げた論文などによると、現在、作品中に署名などがあり、居初つな作品であると考えられる版本は八作品あり、そのうち、貞享五年（一六八八年）刊『女百人一首』は、二作品目にあたる。その跋には、「此巻はいにしへ定家卿小倉山荘にしてえらひ出されし色紙の和哥世上の人哥の鏡とせり今又あつめえらむ所昔より歌人と聞えし女も、をかそへて一首をえり女百人一首と名付て女子の初学のたよりにもならんかしと思ひ侍るのみ 執筆居初氏女都音」とあり、刊行の経緯が明らかにされている。

そこで、このB系統にあたる、貞享四年（一六八七年）写「女百人一首」（宮内庁書陵部蔵）と、貞享五年（一六八八年）刊『女百人一首』¹⁸を翻刻し、以下に掲載する。

三、貞享四年（一六八七年）写「女百人一首」（居初つな書）の翻刻

- 1 わかせこかくへき宵なりさ、かにのくものふるまひかねてしるしも 衣通姫
- 2 み芳野、山下風のさむけくにはたやくよひもわかひとりねん 持統天皇
- 3 飛鳥のあすかのさとおきていなは君かあたりはみえすもあらなん 元明天皇
- 4 浅香山かけさへみゆる山の井のあさくは人をおもふものは 采女
- 5 うた、ねに恋しき人をみてしより夢てふものはたのみはつへき 小野小町
- 6 待人もなきものゆへにうくひすのなきつる花をおりてけるかな 染殿后
- 7 風ふけは興津しら波たつた山よはにや君かひとりこゆらん 紀有常女
- 8 雪のうちに春はきにけり鶯のこほれるなみた今やとくらん 二条后
- 9 人わたすことたになきを何しかもなからのはしと身はなりにけん 七条后
- 10 桜花春くは、れるとしたにも人のこゝろにあかれやはする 伊勢

- 11 諸共にあはれといはずは人しれぬとはすかたりを我のみやせん 俊賢卿母
12 としふれは我くろかみもしら川のみつわくむまで老にけるかな 檜牆女
13 忘れしとたのめし人は有ときくいひしことのはいつちゐにけん 右近
14 君か手にまかする秋の風なれはなひかぬ草もあらしと思ふ 中務
15 人をまつかとはくらくそ成にけるたのめし月のうちにみえねは 監命婦
16 袞風の音にみたる、琴のねをひけはねの日のこ、ちこそすれ 斎宮女御
17 池水の底にはあらてねぬなわのくる人もなしまつ人もなし 明日香采女
18 浅みとりかひある春にあひぬれは霞ならねとたちのほりけり 大江玉淵女
19 絶ぬるかかけたにみえはとふへきをかたみの水はみくさ居にけり 右大將道綱母
20 秋はた、物をこそ思へ露かゝる萩のうへふく風につけても 源重之女
21 よるの鶴の都のうちにこめられて子をこひつゝもなきあかすかな 儀同三司母
22 雪ませに村くみえしわかくさのなへてみとりになりけるかな 出羽弁
23 暮をまつ雲井のほとも覚つかなふみ見まほしきかさ、きのはし 上東門院
24 秋くれはときはの山の袞かせもうつるはかりに身にそしみける 和泉式部
25 入かたはさやかなりける月かけをうわの空にも待し宵かな 紫式部
26 踏はおしふまねはゆかかんかたもなし心つくしの山さくらかな 赤染衛門
27 よしさらはつらさは我にならひけりたのめてこぬはたれかをしへし 清少納言
28 めつらしくけふたちそむる鶴の子はちよのむつきをかさぬへきかな 伊勢大輔
29 露の身のきえは我こそさきた、めをくれんものか森の下くさ 小馬命婦
30 秋かせは吹むすへともしら露のみたれてをかぬ草の葉そなき 大式三位

- 31 雪かとそよそにみつれとさくら花折てはまさる色なかりけり 小式部内侍
32 かへりては身にそふものと知ながら暮行としをなにとふらん 上東門院兵衛
33 いかなれはしらぬにおふるうきぬなはくるしやわか身人しれすのみ 馬内侍
34 思ひやれとふ人もなきやまさとのかけひの水のこゝろほそさを 上東門院中将
35 いかにねておくるならひにいふことそきのふをこそとけふをことしと 小大君
36 あふまてのみるめかるへきかたそなきまた波なれぬいせのあま 相模
37 浅からぬこゝろそみゆる音羽川せき入し水のなかれたえせて 周防内侍
38 なへて世のうきになかるゝ菖蒲草けふまでかゝるねはいかゝみる 小少将
39 散かゝる紅葉のいろはふかけれとわたれはにこる山川の水 二条院讃岐
40 かた／＼に引わかれつゝあやめくさあらぬねをやはかけんと思ひし 陽明門院
41 年経たる姿たになくは浅茅原なにかむかしのしるしならまし 江侍従
42 恋すとも泪の色のならせはしはしは人にしられさらまし 弁乳母
43 をのつからさこそはあれと思ふまにまことに人のとはすなりぬる 大納言経信母
44 思ひやれしらぬ雲路も入かたの月よりほかのなかめやはある 康資王母
45 吹風ものときき花の都鳥おさまれる世のことやとはまし 少将内侍
46 庭のはなもとのこすゑに吹かへすちらすのみやはこゝろなるへき 郁芳門院安芸
47 行すへをまつそ久しき君かへん千代のはしめの子の日とおもへは 京極前関白家肥後
48 忍ひねはをとらしものをほとゝきすおのれのみとは思はさらなん 小弁
49 をく露もしつ心なく秋かせにみたれてをかぬ草の葉そなき 祐子内親王家紀伊
50 浅緑花もひとつにかすみつつおほろにみゆる春の夜の月 菅原孝標女

- 51 た、たのめ細谷川のまろ木橋ふみ返してはおちさらめやは 上西門院
52 磐常なる松もや春をしりぬらん初子をいはふ人にひかれて 待賢門院堀河
53 白雲にまかふさくらの梢にてちとせの春をそらにするかな 待賢門院中納言
54 たのめをかんた、さはかりを契にてうき世の中を夢になしてよ 定家卿母
55 たのめをかんた、さはかりを契にてうき世の中を夢になしてよ 皇嘉門院
56 歎かしと思へは人につらかりしこの世なからのむくひなりけり 皇嘉門院尾張
57 おもひ川岩間によとむ水くきをかきなかすにも袖はぬれけり 皇嘉門院別当
58 春風の霞吹とくたえまよりみたれてなひく青柳のいと 殷富門院大輔
59 しらさりきうき身なからにめぐりきておなし雲井の月をみんとは 近衛太皇太后宮
60 雲井よりた、もりきたる月なれば朧けにてはいはしとそおもふ 忠度母
61 天地のひらけし神のみことのり千とせの秋はわか君のため 俊成卿女
62 まつかねを小嶋か磯のさよまくだいたくなぬれそ漕の袖かは 式子内親王
63 野へことに音信わたるあき風をあたにもなひく花す、きかな 八条院六条
64 いさ、らはなみたくらへんほと、きす我もうきよにねをのみそなく 建礼門院
65 忘れしの契りたかはぬ世なりせはたのみやせまし君か一こと 右京大夫
66 花さそふ比良の山かせ吹にけり漕行舟のあとみゆるまで 宮内卿
67 まつよひに更行鐘のこゑきけはあかぬわかれの鳥はものかは 小侍従
68 身にかへて花もおしまし君か世に見るへき春のかきりなければ 参河内侍
69 こと、はん野しまか磯のあまころも波と月とにいか、しほる、 七条院大納言
70 心していたくな啼そきりくすかことかましき老のねさめを 後鳥羽院下野

- 71 春のよの朧月よやこれならん霞にくもる有明のそら 宜秋門院丹後
- 72 月の色もさえ行よはの秋風にわか身ひとつところもうつ也 土御門院小宰相
- 73 山川をなはしろ水にまかすれば田面にうきて花そなかる、 安嘉門院四条
- 74 かゝらすはなにかわかれのおしからんなれぬるはかりくやしきはなし 安嘉門院大弐
- 75 この葉のかゝるかたなく成ぬれはいつはりさへそ今はこひしき 安嘉門院高倉
- 76 夏引の手曳の糸のふしふともたえぬおもひにむすほ、れつ、 嘉陽門院越前
- 77 身をさらにおなしうき世と思はすは岩ほの中をたつねみてまし 式乾門院御匣
- 78 それをたに心のまゝのいのちにてやすくも恋に身をやかへさん 藻壁門院少将
- 79 音もせて袖ぬらせはや春雨のふるはなみたと人のいひけん 鷹司院帥
- 80 浦つたふ霜夜のちとりこゑさえて塩干のかたに友さそふなり 新大納言
- 81 峯のあらし麓の川の音をのみいつまで友とあかしくらさん 遊義門院
- 82 富士のねによそへていはゝわか恋のためしあるにもなりぬへきかな 今出河院近衛
- 83 夢とたにおもひ定めぬあふ事をうつゝになしてたれもらすらん 権中納言公宗母
- 84 行舟の跡なきかたをしたひてもはるはとまらぬ八重のしほかせ 達智門院
- 85 せきかねておつるはかりそ今もなをとにはたてぬ袖の滝つせ 達智門院兵衛
- 86 小篠原なひく尾はなの冬枯にをともかはりてふる霰かな 一条
- 87 思ふことのあらたまるへき春ならはうき身もとの暮やいそかん 章義門院
- 88 帰るさの道もやまかふ夕くれのかすむ雲井にきゆる雁金 永福門院
- 89 夢かなをみたれそめにし朝ねかみ又かきやらんすゑもしらねは 永福門院右衛門督
- 90 ふれはかつきゆる朝明のふる柳なひくともなき雪のしらいと 永福門院内侍

91 雨はる、夕かけ山に鳴せみのこゑよりおつる木々のしら露 俊光女

92 萌出る野へのわかなの雪ませにつむ手もさむくこほる袖哉 進子内親王

93 立ぬへきうき名をかねて思はすは風にけふりのなひかさらめや 右大臣公顕女

94 露ふかき霧のまかきの朝ほらしほれそ勝る花のいろく 広義門院

95 物思はぬ人はよそにやなかむらんうき身ひとつの秋のゆふくれ 前大納言経長母

96 夢路にはうつゝはかりの関やなきこゆとそみつるあふさかのやま 従三位為子

97 思ひよはる身こそはたえす成とても人の忍はん名をはもらさし 従一位教良女

98 かけなひくひかりをそへて此宿の月もむかしをうつすとそみる 権大納言公直母

99 有明のかけをしるへに听はれて夜ふかくみゆる須磨のうら船 崇賢門院

100 袖ふれていく春なれん咲ふちの袂よりあまる千代の匂ひに 通陽門院

四、貞享五年（一六八八年）刊『女百人一首』（居初つな書）の翻刻

1 万葉集恋哥わかせこがくべき宵なりさゝがにのくものふるまひかねてしるしも 衣通姫

2 古今集卷第一春哥雪のうちに春はきにけり鶯のこほれるなみだいまやとくらん 二条后

3 新古今集第十三羈旅哥飛鳥のあすかのさとおきていなば君かあたりはみえずもあらなん 元明天皇

4 万葉集恋哥浅香山かげさへみゆる山の井のあさくは人を思ふものかは 采女

5 古今集卷第十八雑歌風ふけば興津しら浪立田山夜はにや君がひとりこゆらん 紀有常女

6 新勅撰集卷第八羈旅哥みよし野の山下風のさむけくにはたや今宵も我ひとりねん 持統天皇

7 続千載第四秋哥物思はぬ人はよそにや詠らんうき身ひとつの秋のゆふ暮 前大納言経長女

8 新千載第十三恋哥ゆめちには現はかりの関やなきこゆとぞみつる逢坂の山 従三位為子

- 9 後撰集第十五雜哥 人わたすことだになきを何しかも長良の橋と身は成にけん 七条后
- 10 古今集卷第一春歌 桜花春くは、れるとしだにも人の心にあかれやはする 伊勢
- 11 新古今集第十一恋哥 諸共にあはれといはずは人しれぬとはずがたりを我のみやせん 俊賢卿母
- 12 後撰集卷第十七雜哥 としふればわが黒髪もしら川のみつはくむまで老にけるかな 檜牆女
- 13 後撰集卷第十恋哥 忘れじとたのめし人はありときくいひし言葉いづちにけん 右近
- 14 拾遺集卷第八雜哥 植てみる草葉ぞよをばしらせけるをきてはきゆるけさの朝露中務
- 15 新後拾遺集第十三恋哥 人をまつ門はくらくぞなりにけるたのめし月のうちに見えねば 監命婦
- 16 拾遺集卷第八雜哥 奈風の音に乱る、琴のねをひけばねのびのこ、ちこそすれ 斎宮女御
- 17 拾遺集卷第十九雜恋哥 池水の底にはあらてねぬなわのくる人もなしまつ人もなし 明日香采女
- 18 大和物語哥 浅みとりかひある春にあひぬれば霞ならねどたちのほりけり 大江玉淵女
- 19 拾遺集卷第二春哥 都人ねてまつらめや時鳥今ぞ山辺をなきて出なる 右大將道綱母
- 20 新古今集卷第四秋哥 秋はた、物をこそ思へ露かゝる萩のうへふく風につけても 源重之女
- 21 詞花集卷第九雜哥 よるの鶴都のうちにこめられて子を恋つゝも鳴あかすかな 儀同三司母
- 22 玉葉集卷第一春歌 雪まぜにむら／＼みえし若草のなべて緑になりける哉 出羽弁
- 23 続古今集卷第四秋哥 暮をまつ雲井のほども覺つかなふ見まほしき鵲のはし 上東門院
- 24 新古今集卷第十四恋哥 入かたはさやかなりける月かけをうわの空にも待しよひかな 紫式部
- 25 千載集卷第二春哥 踏ばおしふまねはゆかかんかたもなし心づくしの山ざくらかな 赤染衛門
- 26 新古今集卷第四秋哥 秋くれば常磐の山の松風もうつるばかりに身にぞしみける 和泉式部
- 27 詞花集卷第九雜恋哥 よしさらばつらさは我にならひけりたのめて来ぬはたれかおしへし 清少納言
- 28 詞花集卷第五賀哥 めづらしくけふたちそむる鶴の子はちよのむつきをかさぬべきかな 伊勢大輔

- 29 新古今第十八雜哥 露の身の消ば我こそさきだ、めをくれんものか森の下くさ 小馬命婦
- 30 玉葉集第二春哥 雪かとぞよそにみつれと桜花折てはまさる色なかりけり 小式部内侍
- 31 新古今第四秋哥 秋かぜは吹むすべどもしら露のみだれてをかぬ草の葉ぞなき 大式三位
- 32 後拾遺集卷第十八雜哥 都出て秋より冬に成ぬれは久しき旅のこ、ちこそすれ 上東門院新宰相
- 33 後拾遺集第十一恋哥 いかなればしらぬにおふるうきぬなわくるしやこ、ろ人しれずのみ 馬内侍
- 34 後拾遺集第十七雜哥 思ひやれとふ人もなき山ざとのかけひの水のこ、ろぼそさを 上東門院中将
- 35 後拾遺集第一春歌 いかにてねておくる朝にいふことぞ昨日をこそと今日をことしと 小大君
- 36 新古今第十一恋哥 逢までのみるめかるべきかたぞなきまだ浪なれぬ磯のあま 相模
- 37 新古今第十雜哥 浅からぬこ、ろぞみゆる音羽川せき入し水のながれたえせで 周防内侍
- 38 新古今第三夏哥 なべて世のうきにながる、菖蒲ぐさけふまでか、るねはいかゝみる 小少将
- 39 新古今第九秋哥 散かゝる紅葉のいろはふかけれとわたればにぐる山川の水 二条院讃岐
- 40 新古今第十四恋哥 かた／＼にひきわかれつ、あやめ草あらぬねをやはかけんと思ひし 陽明門院
- 41 後拾遺第十八雜哥 としへたる松だになくは浅茅原なにかむかしのしるしならまし 江侍従
- 42 後拾遺第十四恋哥 恋すとも涙のいろのなかりせばしは人にしられざらまし 弁乳母
- 43 新古今第十五恋哥 をのづからさこそはあれと思ふまにまことに人のとはず成ぬる 大納言経信母
- 44 後拾遺第十三恋哥 おもひやれしらぬ雲路も入かたの月よりほかの詠やはある 康資王母
- 45 続古今集第九雜哥 吹風ものどけきはなの都鳥おさまれる世のことやとはまし 少将内侍
- 46 金葉集卷第一春哥 庭の花もとの木末に吹かへせちらすのみやは心なるべき 郁芳門院安芸
- 47 千載集卷第十一 行すゑをまつぞ久しき君がへん千代のはじめの子の日と思へは 京極前関白家肥後
- 48 続後拾遺第三夏哥 忍びねはおとらじものを郭公をのれのみとはおもはざらん 小弁

- 49 新古今卷第四秋哥をく露もしづ心なく秋風にみだれてさけるまの、萩原 祐子内親王家紀伊
- 50 新古今集卷第一春歌浅みどり花もひとつに霞つる朧にみゆる春の夜の月 菅原孝標女
- 51 新後拾遺第十羈旅哥有明のかげをしるべにさそはれて夜ふかくみゆる須磨の浦船 崇賢門院
- 52 新統古今第七賀哥袖ふれて幾春なれん咲藤の姿よりあまる千代の匂ひに 通陽門院
- 53 新後撰第十八雜哥峯の嵐麓の川のをとをのみいつまで友と明しくらさん 遊義門院
- 54 新統古今卷第一春哥咲てちるつらさはかねてならひにきたかためなをも花をまつらん今出河院近衛
- 55 千載集十四恋哥恋をのみすがたの池に水草ゐてすまでやみなん名こそおしけれ 待賢門院安芸
- 56 千載卷第一春歌常磐なる姿もや春を知ぬらん初子をいはふ人にひかれて 待賢門院堀河
- 57 金葉集第一春哥白雲にまがふさくらの梢にてちとせの春を空にしるかな 待賢門院中納言
- 58 新古今第十三恋哥たのめをかんたゞさばかりを契にてうき世の中を夢になしてよ 定家卿母
- 59 玉葉集卷第十四雜哥しらざりきうき身ながらにめぐりきておなじ雲井の月をみるとは 近衛太皇太后宮
- 60 新古今集第十五恋哥ならはねば人のはぬもつらからでくやしきにこそ袖はぬれけれ 前中納言教盛母
- 61 新勅撰集第十一恋歌おもひ川岩間によどむ水ぐきをかきながすにも袖はぬれけり 皇嘉門院別当
- 62 新古今第一春哥春風の霞吹とくたへまよりみだれてなびく青柳のいと 殷富門院大輔
- 63 建保二年内裏哥合賀哥天地のひらけし神のみことのりちとせの秋は我君のため 俊成卿女
- 64 新古今第十羈旅哥松がねのおじまか磯のさよ枕いたくなぬれそ邊の袖かは 式子内親王
- 65 新古今第四秋哥野べごとに音信わたる秋かぜをあだにもなびく花ずゝきかな 八条院六条
- 66 千載集卷第十四恋哥わか袖のなみだやにほのうみならんかりにも人をみるめなければ 上西門院兵衛
- 67 新古今第十三恋哥忘れじの契りたがはぬ世なりせは頼やせまし君が一事 右京大夫建礼門院
- 68 新古今第二春哥花さそふ比良の山かぜ吹にけり漕行舟の跡みゆるまで 宮内卿後鳥羽院

- 69 新古今卷第十三恋哥待よひに更行鐘のこゑきけばあかぬわかれの鳥はもののかは 小侍従
- 70 新古今第七賀哥身にかへて花もおしまし君か代にみるへき春のかぎりなければ 参河内侍
- 71 新古今第四秋哥こと、はん野じまか磯のあまころも波と月とにいかゞしほる、 七条院大納言
- 72 続後撰第三秋哥心していたくな啼そきりぐすかことかましき老の枕に 後鳥羽院下野
- 73 新勅撰第一春哥春の夜の朧月よやこれならんかすみにくもる有明のそら 宜秋門院丹後
- 74 新勅撰第五秋哥月のいろもさえ行よはの秋風にわが身ひとつと衣うつ也 土御門院小宰相
- 75 風雅集卷第三春哥山川をなはしろ水にまかすれば田面にうきて花ぞながる、 安嘉門院四条
- 76 玉葉卷第八旅哥か、らずはなにかわかれの惜からん馴ぬるばかりくやしきはなし 安嘉門院大貳
- 77 新拾遺第三夏哥山の端の月に啼夜のほと、ぎすまたれしよりもいこそねられね 後深草院少将内侍
- 78 新拾遺第十二恋哥湊人のあしまを分て漕舟も思ふ中にはさはらざりけり 藻壁門院但馬
- 79 新後拾遺第十四恋哥ことの葉のかゝるかたなく成ぬれば偽りさへぞ今はこひしき 安嘉門院高倉
- 80 新古今第十二恋哥夏引の手曳の糸のふしへてもたえぬ思ひに結ばほれつ、 嘉陽門院越前
- 81 新統古今第十七雑哥音もせて袖ぬらせばや春雨のふるはなみだと人のいひけん 鷹司院帥
- 82 新拾遺第十八雑哥浦つたふ霜夜のちとり声さえて塩干のかたに友さそふ也 延政門院新大納言
- 83 新統古今第二春哥今はとてこゆらんかたもしら波のあとなき春のすゑのまつ山 権中納言公宗母
- 84 新千載卷第二春哥行船のあとなきかたをしたひても春はとまらぬ八重のしほ風 達智門院
- 85 新拾遺第十一恋哥せきかねておつるばかりそ今もなををとにはたてぬ袖の滝つせ 達智門院兵衛
- 86 新千載卷第六冬哥小篠原なひく尾ばなの冬枯にをともかはりてふる霰かな 照慶門院一条
- 87 玉葉第十五雑思ふことのあらたまるべき春ならはうき身もとしの暮やいそがん 章義門院
- 88 続千載第一春歌帰るさの道もやまかふ夕暮のかすむ雲ゐにきゆる雁金 永福門院

89 新後拾遺第三春哥 雨はる、夕かげ山に鳴蟬のこゑよりおつる木々のしら露 俊光女

90 延文御百首春哥 萌出る野べのわかなの雪まぜに摘手も寒くこほる袖哉 進子内親王

91 風雅第十恋哥 夢かなを乱れそめにし朝ねがみ又かきやらん末もしらねは 永福門院右衛門督

92 風雅第八冬哥 ふればかつ氷るあさけのふる柳なびくともなき雪のしらいと 永福門院内侍

93 新千載集卷第十二恋哥 紅ゐにかたしく袖はなりにけりなみだや夜半のしぐれなるらん 皇嘉門院

94 新古今集卷第十五恋哥 歎かじなおもへは人につらかりし此世ながらのむくひなりけり 皇嘉門院尾張

95 風雅第六秋哥 夕日影さひしくみゆる山もとの田面におつる雁の一つら 後伏見院中納言

96 新千載第四秋哥 露ふかき霧の籬の朝ぼらけしほれぞまさる花のいろく 広義門院

97 風雅第五秋哥 一しほり雨は降ぬる庭のおもにちりてうつろふ萩が花ずり 権大納言公直母

98 玉葉第九恋哥 思ひよはり身こそはたえずなるとも人の忍ばん名をばもらさし 従一位教良女

99 古今集卷第十二恋哥 うた、ねに恋しき人をみてしより夢てふものはたのみそめてき 小野小町

100 古今集卷第一春哥 侍人もなきものゆへにうぐひすのなきつる花を折てげる哉 染殿后

五、B系統の『女百人一首』の編者について

本稿において翻刻を紹介した、貞享四年写本と貞享五年刊本を含めた、B系統の伝本（版本を模写したものである、江戸時代後期頃写「絵入女百人一首」（二松学舎大学蔵）を除く）の本文を比較したところ、おおよその和歌の排列は同じであるが、以下のようなことが指摘できることがわかった。

1 貞享四年写本と貞享五年刊本は、同じ人物（居初つな）による署名があり、貞享四年写本は、他の伝本とは、選ばれている和歌や作者、およびそれらの排列などが異なる。このことから、年記の通りに、先に写本が成立し、その内容を整理し

たものが版本として刊行されたと考えられる。

2 貞享五年刊本と、嘉永七年（一八五四年）写「女房百人一首」（数量和歌「所収」）（国立歴史民俗博物館蔵）、書写年不明「女百人一首」（道明寺蔵）、書写年不明「女百人一首草」（道明寺蔵）、書写年不明「女百人一首」（北海道大学蔵）、書写年不明「女百人一首」（三康図書館蔵）は、和歌の排列が一致している。版本と写本という性質上、先に貞享五年刊本が成立して全国に流布し、その内容を書写したものが、前記の伝本であると考えられる。

3 嘉永七年（一八五四年）写「女百人一首」（東京大学蔵）、江戸時代前期頃写「女百人一首」（歌集「所収」）（宮内庁書陵部蔵）、江戸時代頃写「女房百人一首」（宮内庁書陵部蔵）は、おおよその和歌の排列は2に挙げた伝本と同じであるが、76番歌（安嘉門院大弐）が脱落して100番歌として記されている。このことから、江戸時代前期頃写「女百人一首」（歌集「所収」）（宮内庁書陵部蔵）と、江戸時代頃写「女房百人一首」（宮内庁書陵部蔵）の先後関係は不明であるが、両書はいずれかを参照して書写され、後に、嘉永七年（一八五四年）写「女百人一首」（東京大学蔵）が書写されたと考えられる。

4 安永九年（一七八〇年）刊『女房百人一首』は、11番歌からの和歌の排列などが異なる。刊行年から考えても、貞享五年刊本よりは遅く成立したと考えられる。

この結果から、B系統の成立年代と編者について考察してみたい。

まず、成立年代についてである。B系統の内容については、伊藤嘉夫氏の「女百人一首」『跡見学園国語科紀要』第二十号（跡見学園国語科研究会一九七二年三月）では、「撰者は不明であるが、主として勅撰集の古今集から新続古今集まで、物語では大和物語から女房の歌をあげている。」としており、『江戸時代女性文庫』第九十巻（大空社一九九八年）の吉海直人氏解題では、「本書の内容は、一番衣通姫から百番染殿后歌までの女性の歌百首からなっている。歌人の生没年を調べてみると、奈良時代から室町時代に互っていることがわかる。形式は一面一首で、まず作者名があり、上部に和歌が散らし書きにされ、下部には歌意図を背景に作者像（歌仙絵）が描かれている。また右端には出典がやや小字で明記されている。

基本的には勅撰集からの撰人が多いが、それ以外に万葉集（二首）や大和物語（一首）・建保四年内裏歌合（一首）・延文御百首（一首）なども出典としてあがっている。そのうち新古今集が二六首と全体の四分の一以上を占めているのが撰歌の特徴であろう。」としている。これらのことから、久保田淳氏の『中世和歌史の研究』（明治書院一九九三年）では、B系統の本文の成立は、『新統古今和歌集』が成立した、永享十一年（一四三九年）以降であると指摘されている。一方、大伏春美氏の『女房三十六人歌合』と女百人一首』『語文』第一一九号（日本大学国文学会二〇〇四年六月）において、B系統の本文には、皇嘉門院と皇嘉門院別当の和歌が入集しているが、実はいずれも皇嘉門院別当の和歌であるという問題点が指摘されている。この誤りの原因について考察すると、貞享四年写本では、皇嘉門院の和歌は、その一つ前の定家卿母の和歌（たのめをかんた、さはかりを契にてうき世の中を夢になしてよ）と同じものが重複して書写されてしまっている。よって、貞享五年刊本を刊行する際に、改めて皇嘉門院の和歌を載せるつもりが、取り急ぎ和歌を選んだために、誤って、皇嘉門院別当の和歌を載せてしまったのではないだろうか。このようにして考えると、その他の伝本は、全てこの誤りを踏襲している。B系統の伝本は、この貞享五年刊本を親本にしていると考えても差し支えないのではないだろうか。従来、B系統の伝本は、久曾神昇氏の『日本歌学大系』別巻第六（風間書房一九八四年）に翻刻が掲載されている、江戸時代前期頃写「女百人一首」（歌集）所収」（宮内庁書陵部蔵）が広く知られており、この系統の親本とされていたが、私見では、B系統は、貞享四年写本が最も古い伝本であり、B系統の『女百人一首』の成立年代は、江戸時代前期であり、その編者は、居初つなであると考ええる。

六、おわりに

最後に、改めて今回の結論を述べると、以下の通りである。まず、『女百人一首』は、その本文によって、おおよそ、AとE系統の五系統に分類することができる。

このうち、最も伝本が多く、江戸時代前期～後期まで幅広い時代において流布したと考えられるB系統は、それぞれの伝

本の本文を比較した結果、成立年代は江戸時代前期（貞享四年（一六八七年）頃）で、編者は、江戸時代前期の女性書家・作家・絵師である居初つなであると考えられる。B系統の内容の評価については、大伏春美氏の「『女房三十六人歌合』と女百人一首」『語文』第二一九号（日本大学国文学会二〇〇四年六月）において、「歌人の選択も著名歌人が多く妥当であり、伝本も多いので、流布した本と考えられる。」とあり、もし、その編者が居初つなであった場合、彼女は女性歌人や和歌の知識が豊富な、大変教養のある女性であったと考えられる。

注

① 伊藤嘉夫「女百人一首」『跡見学園国語科紀要』第二十号（跡見学園国語科研究会一九七二年三月一三〇〇頁）に、「室町時代の異種百人一首は、（中略）甚だ少ないが、江戸時代に入って印刷技術が進み、一般庶民の読書人口が増加したことなどで、寛文頃から異種百人一首の印行が盛にな」ったとある。

② 女性の和歌のみでつくられた百人一首には様々な種類のものがあるが、ここでは、『女百人一首』という題名の作品、あるいはそれらと内容が類似する作品のみを対象とする。

③ 『国書総目録補訂版』第一巻（岩波書店一九八九年七二〇頁）の『女百人一首』項に「文化八版―岩瀬」とある、文化八年（一八一一年）刊『女要小倉文台』（西尾市岩瀬文庫古典籍書誌データベースにおける旧書名は『女百人一首』）は、内容が『百人一首』なので含めていない。また、伊藤嘉夫「女百人一首」『跡見学園国語科紀要』第二十号（一三〇〇頁）に「『女百人一首』（菅郷女）天保三（一八三二）とあるのは、天保三年（一八三二年）刊『女百人一句』（鶯卿女編）のことであり、百人の女性俳人の発句を一人一句ずつ選んでつくられた俳諧集なので含めていない。

④ 東洋文庫蔵。

⑤ 漆山又四郎氏蔵・国立公文書館蔵・宮内庁書陵部蔵・西尾市岩瀬文庫蔵・東京国立博物館蔵・跡見学園女子大学蔵（二冊）。
⑥ 大阪公立大学蔵。

- (7) 嘉永七年（一八五四年）写「女百人一首」（東京大学蔵）の奥書「右百首は中山家十九代権中納言兼親卿のみつからかれるひし一卷を人のもとより借いてたる（以下略）」を参照。
- (8) 書院部所蔵資料目録・画像公開システム (<https://storyobu.kunichio.go.jp>) で画像が公開されている。また、久曾神昇『日本歌学大系』別巻第六（風間書房一九八四年五四〇頁～五四六頁）に翻刻が掲載されている。
- (9) 昭和三年（一九二八年）の印記がある。
- (10) 東京国立博物館蔵・東京大学蔵・東北大学蔵・祐徳稲荷神社蔵・東京家政学院大学蔵・東京都立図書館蔵・刈谷市中央図書館蔵・国文学研究資料館蔵・天理図書館蔵・内藤記念くすり博物館蔵・武庫川女子大学蔵・大阪市立中央図書館蔵・跡見学園女子大学蔵・石川透氏蔵。
- (11) 伊藤嘉夫「女百人一首」『跡見学園国語科紀要』第二十号（一三〇一頁～一三〇三頁）に翻刻が掲載されている。西尾市岩瀬文庫蔵・住吉大社蔵・内藤記念くすり博物館蔵・大阪公立大学蔵・跡見学園女子大学蔵・漆山又四郎氏蔵。
- (12) 『袖珍文庫第二十三種十三種百人一首』（三教書院一九一〇年一四一頁～一五八頁）、伊藤嘉夫「女百人一首」『跡見学園国語科紀要』第二十号（一三〇四頁～一三〇六頁）に翻刻が掲載されている。国立国会図書館蔵・東京国立博物館蔵・漆山又四郎氏蔵・東京都立中央図書館蔵・東洋大学蔵（三冊）・上田市立上田図書館蔵・跡見学園女子大学蔵（二冊）・東洋文庫蔵。
- (13) 久保田淳『中世和歌史の研究』（明治書院一九九三年八二三頁～八三三頁）に翻刻が掲載されている。
- (14) 宮城教育大学蔵。
- (15) 居初つなが、自身の作品の本文および挿絵を書いている例は、元禄八年（一六九五年）刊『女実語教』（刊記に「居初氏女津奈書画之」とある）などである。
- (16) 石川透『西行物語』版本の制作者について『西行学』第四号（西行学会二〇一三年八月四十九頁）にも、「居初つなは」おそらくは、日本で最初的女流絵本作家といった存在となるであろう」とある。
- (17) 居初つな作と考えられる版本は、貞享四年（一六八七年）刊『女今川』、貞享五年（一六八八年）刊『女百人一首』『女文章鑑』、元禄三年（一六九〇年）刊『女書翰初学抄』、元禄七年（一六九四年）刊『女教訓文章』、元禄八年（一六九五五年）刊『女実語教』、元禄十年（一六九七年）刊『女筆調法記』、享保十一年（一七二六年）刊『女筆琵琶海辺』などである。
- (18) 『女百人一首』（祐徳稲荷神社所蔵）

出典：国書データベース <https://doi.org/10.20730/100208013>